

# ナイチンゲールにおけるスピリチュアリティの本質と現代

菱刈美和子

## Essence of Spirituality in Nightingale and Today

Miwako HISHIKARI

This article aims to clarify that the essence of spirituality in Nightingale. It is Christianity in origin. History of nursing has a close relation to Christianity in Europe. As B. S. Barnum says, 'Today we are moving into an era in which interest is being renewed in the spiritual motivation of Nightingale'.

### はじめに

わたしたち人間は、生まれるときにも nurse (保育・養育) を必要とし、死にゆく際にも nurse (看護・看取り) を必要とする。しかし、人間は人生全般にわたって、絶えず nurse を必要とせざるをえない生き物である。さらに、care はもちろんのこと、最終的には cure も必要とする。なぜなら、人間だけが自己のみならず、他の生命の尊厳に気づくことのできる動物だからである。

人間は、人と人の間と記される通り、この社会という横の関わりのなかで生きる動物である。が、究極のナースやケアやキュアが必要とされるのは、むしろここから離れ、どこか別のところへ逝くという、危機的な場面であろう。まさに、死に直面したクリティカルな状況である。このとき、わたしたちは看護する他者とともに、この社会という横の関わりのみならず、これを超えた縦の関わり、つまりわたしたちの存在を根底で支えるものとの関わりを意識せざるをえない。この意識と気づきが、スピリチュアリティであった。

よって、看護の歴史とスピリチュアリティは、古来密接に結びついている。とりわけ、ナイチンゲールに至っては、その実践の根幹に、つね

にスピリチュアリティがあることが指摘されてきた。が、看護の歴史全体のなかで、スピリチュアリティがどのようにとらえられてきたのか。その変遷と変質の全体像を浮き彫りにするのは、容易ではない。

小論では、そうした作業の準備として、再度ナイチンゲールに立ち返り、その本質を再確認する。そして、現代という時代におけるナイチンゲールのスピリチュアリティの布置を明確にし、今後の研究の方向性を示しておきたい。

### 1節 看護スピリットの原点

ここで問題にしているスピリチュアリティは、とくに西洋キリスト教文化圏における霊性であって、その基本は『聖書』の言葉、イエスの招きにある。

イエスは、人々を救済するキリストとして、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」<sup>1)</sup>と語った。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」<sup>2)</sup>。つまり、キリスト教の物語によれば、わたしたち人間はみな「罪人」であり、癒しと救いを求める「迷える子羊」である。その最終的なケアとキュアを、イエスは与えてくれるキリスト(救い主)である。

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのものに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである<sup>3)</sup>。

聖餐式でも唱えられる、このイエスの招きの言葉にこそ、人類全体に向けたケアとキュア、そしてナースの根本精神が、わかりやすく余すところなく述べられているといっても過言ではないであろう。

看護を必要とする人々、つまりペイシエントとは「疲れた者」である。「重荷を負う者」である。患者のみならず、わたしたちはみなペイシエントである。それを休ませてくれるのが、イエスであり、これに学ぶ人々である。つまり、キリスト教における「キリストのまねび」(imitatio Christi) にこそ、あらゆる看護のスピリットが凝縮しているといえよう。わたしたち一人ひとりが、イエスのごとく、柔和で謙遜となり、疲れた者や重荷を負う者に仕えること。ここに、看護の究極の原点がある。ゆえに、西洋では、主に病院修道会など、教会や修道院が看護や医療に長く携わってきた<sup>4)</sup>。

ところで、こうした看護スピリットの原液は、いわば強烈であって、だれでもにこうした「まねび」や「学び」ができるわけではない。とはいうものの、ケアやキュアに関心が集まる現代の状況は、逆にこの「原液」を、あるいは原点を再確認する必要性をも示唆しているといえよう。

そこで、ナイチンゲールは、まさにこの原点に抛り立ち、それを神秘主義と関連させながら、特定の宗教によらないスピリチュアリティへと昇華させた、最初の人物である。以下、バルナムを手がかりに<sup>5)</sup>、ナイチンゲール・インパクトについて素描してみたい。

## 2節 ナイチンゲールの衝撃

近代看護の母と称されるナイチンゲールは<sup>6)</sup>、それまで主に宗教施設によって運営されていた「非科学的」看護に、サイエンスの視点を取り入れた。それが、modernのゆえんである。しかも、professionalとしての看護を最初に準備したのも彼女である。いわば、宗教と看護とを切り離れたかのように見受けられるナイチンゲール。しかし、その近代看護の実践を原理的に駆動させるモチベーションは、極めて「宗教的」であった。

バルナムによれば、すでにナイチンゲールの時代、医療と看護との分離が始まりかけていた。前節で確認したように、古来医療と看護とは、分ちがたく結びついていた。それが近代科学の進展により、別の営みとして分離し始めたのである。

ナイチンゲール自身は、科学的な観察法を、とりわけ統計学に専心しながら積極的に取り入れていた。そして、看護が医療に仕えることに何の疑問ももってはいなかったという<sup>7)</sup>。しかも、ナイチンゲールに「宗教的」、すなわちスピリチュアルな側面があるとは、活動期のナイチンゲールに接して、ほとんどの看護師が気づくことはなかったという。ところが、ナイチンゲール自身は、しばしばメディテーションや、ときに聞こえてくる「声」について記すほど、神秘主義的な性向をもつ人物であった。しかし、それは何か特定の神といったものとも少し違っていった。以前にも紹介したマクレーが、この点を次のように指摘している。

ナイチンゲールにとって、スピリチュアリティとは知的な信仰ではなく、アクチュアルな体験であった。「わたしは神を信じる」と彼女がいうのと、「わたしはわたしの生命のなかに聖なるものが宿ると感じる」というのは、異なっている。彼女は、前者の信じるよりも、むしろ後者のような体験を感じていて、

それが変化を可能させる要素となっている<sup>8)</sup>。

つまり、ナイチンゲールにおける看護の原点には、こうした生命 (life) への驚きと、その生命のありがたさ、もしくは神聖さに対する畏敬があったことになる。近代看護の母・ナイチンゲールにおける看護スピリットの原点には生命への畏敬があり、この体験を可能にするからだの働きが、スピリチュアリティともいわれる機能であるといえるだろう。

### 3 節 現代的スピリチュアリティとの相関

ナイチンゲールは、伝統的なキリスト教神秘主義から豊かな滋養をくみ取りながらも、現代に生きるわたしたちにとっても「翻訳」可能なスピリチュアリティについて説いていた。窪寺は、わたしたち人間が危機に直面した際に顕著となるスピリチュアリティの機能について、その本質的特徴を3つ指摘している<sup>9)</sup>。第1は、スピリチュアリティの関係性。第2は、スピリチュアリティの機能。第3は、スピリチュアリティの成果である。

第1は「聖なるもの」との関係性であるが、スピリチュアリティは神的存在との垂直的関係をもつ点である。人によって神的存在は異なるが、人生の土台となっているものである<sup>10)</sup>。

ナイチンゲールが、つねに存在する divine presence を感受し、これとの関わりのなかで生きていたことは、これまでの一連の拙稿でも、すでに指摘してきた通りである。人間は、社会的ないわば水平的な関わりのなかだけで生きる存在ではなく、自己を超越した「X」との垂直的な関わりにおいても内的生命を営んでいる。これこそが、その人の人生の本当の土台を形成する。これがない場合、その人は、ただ人間同士の関わりのなかで右往左往し、最悪の場合には絶望せざるをえない。

第2は失ったものの回復で「癒し」である。人間が孤立した存在ではなしに、他の人間や神的存在との絆の中で生きるのである。スピリチュアリティは失われた関係を回復するという意味で、全体性の回復 (癒し) である<sup>11)</sup>。

すでに1節で見たように、この癒しの機能を、わたしたち弱い人間は、とくに危機に直面したクリティカルな状況のなかで、心から渴望せざるをえない。ただし、これは第1の垂直的な関係性を生きる者にしか期待しえない働きであり、実践である。ナイチンゲールもまた、そのことを深く自覚していた。

第3は「自己を生きる」という結果がもたらされる。スピリチュアリティは人間が生得的にもつ機能で「人間が人間として」生きる為の防衛機能である。いのちが危機にさらされ、既存の生きる意味が失われ、自分の物語りが崩れた時に覚醒して、その「自分のいのちを自分らしく生きる」ことを助ける。今、ここに生きている自分のいのちを生き生きと生きることである<sup>12)</sup>。

ナイチンゲールもまた、人間が生来的にもつ自然治癒力に大きな期待と希望とを寄せていた。自然の法則に従うということを、だれよりも強調し大切にしていたのが、彼女であった。

このように、垂直的な超越世界との関わりとともに、水平的な関わりとしての現実的社会生活を自分らしく営むことを、スピリチュアリティという人間の生得的防衛機能が、可能にしてくれる。

今日、多くの人々が人生の目的や意味を見失い、心に傷を負い、自己を喪失しつつあるなか、こうした生得的なスピリチュアリティが、必然的な防衛機能として覚醒しつつあるのではないだろうか。この働きを自覚したとき、ナイチンゲールはここに生命の畏敬を見出したといえよ

う。ナイチンゲールのスピリチュアリティの本質は、やはりわたしたち人間存在の「自然」(nature)のなかに、確たる基盤をもっていたといえるのではないか。

### おわりに

ナイチンゲールの時代、すでに看護と医師が分裂し、トータル・ライフとしての人間の生命の尊厳が、危機にさらされ始める。スピリチュアルな天職 (spiritual calling) としての看護と科学／職業 (science/profession) としての看護との分裂も、ここに始まる。

本来ナースの仕事とは、生命の畏敬に対する気づきと自覚、以上で見てきたようなスピリチュアリティを欠いては、存立しえない天職である。が、現代こうした天職意識を看護教育のなかで、はたしてどのように覚醒させることができるであろう。看護の歴史とスピリチュアリティとが、元来深く結合していること。そして、スピリチュアリティと科学／看護とが一体であったナイチンゲールという稀有な事例、そのインパクトを、今日のわたしたちは再び受け止め直して、看護教育に取り組む必要があることだけは確かである。

しかし、それには、看護を志す人々にとって、すぐれた意味での「危機」的体験が必要とされることだけは、まちがいあるまい。看護職とは、じつに重く深い仕事である。垂直的な関わりが、希薄あるいは軽薄な現代。ナイチンゲールの衝撃的体験を、看護教育のなかにどのように取り組んでいくのか。今後の課題としたい。

最後に、現代におけるスピリチュアリティケアの実践について付言しておこう。すでに3節で、スピリチュアリティのもつ3つの機能について触れたが、これは反面スピリチュアリティペインへの配慮 (スピリチュアルケア) とも連動している。今日、スピリチュアルケアは、もはや特定の宗教的ケアを意味するものではなくなりつつあり、患者の信仰の有無にかかわらず必要であるとの認識が広まっている<sup>13)</sup>。スピリ

チュアリティペインは、人間ならばだれしもが抱きうる苦しみであり、わたしたちはそうしたスピリチュアルニーズを内在させているともいえる。時間存在、関係存在、自律存在としての人間には、それに対応する苦しみが病や死の自覚とともに覚醒させられる。こうした人間存在に対するスピリチュアリティケアの実践についても<sup>14)</sup>、とくに脳卒中患者の急性・回復期に照準を合わせつつ<sup>15)</sup>、稿を改めて取り上げることにしたい。

### 引用文献

- 1) 『マタイによる福音書』9章12節。
- 2) 同前、9章13節。
- 3) 同前、11章28-30節。
- 4) P. デインツェルバッハー・J. L. ホッグ編『修道院文化史事典』朝倉文市監訳、八坂書房、2008年、237頁以降「病院修道会」参照。
- 5) Barnum, B. S., *Spirituality in Nursing: From Traditional to New Age* (2nd. ed.), New York: Springer Publishing Company, 2003.
- 6) 本学紀要に創刊号より掲載された、一連の拙稿を参照されたい。
- 7) *Ibid.*, p. 30.
- 8) *Ibid.*, p. 31.
- 9) 窪寺俊之ほか『生命倫理における宗教とスピリチュアリティ』見洋書房、2010年、151頁以下。スピリチュアリティの全般的な見取り図については、湯浅康雄監修『スピリチュアリティの現在—宗教・倫理・心理の観点—』人文書院、2003年、148頁を参照されたい。
- 10) 窪寺ほか前掲書、151頁。
- 11) 同前。
- 12) 同前書、151-152頁。
- 13) 村田久行「スピリチュアルケアの理念と実際」『月刊ナーシング』Vol. 24, No. 10, 2004.9. 所収参照。

- 14) 次を参照。E. J. テイラー『スピリチュアル  
ケア—看護のための理論・研究・実践—』  
江本愛子・江本新監訳，医学書院，2008年。
- 15) 差し当たり，百田武司・田中百合子「脳  
卒中患者の急性期の精神的ケア」『BRAIN  
NURSING』Vol. 24, No. 3, 2008. 所収，  
加藤知子・家保美恵子「脳卒中患者におけ  
るスピリチュアルペインの実態とケアの方  
向性—村田理論を用いての検証—」『看護  
総合』2009. 所収などを参照されたい。